

令和 2 年 6 月 1 日現在

機関番号：38001

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K13592

研究課題名（和文）沖縄におけるジュゴン保護と基地反対運動に関する人類学的研究

研究課題名（英文）Anthropological study of dugong protection and anti-base movement in Okinawa

研究代表者

比嘉 理麻 (Higa, Rima)

沖縄国際大学・総合文化学部・講師

研究者番号：00755647

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、沖縄県名護市辺野古の基地反対と結びついたジュゴンの保護活動がどのように生じ、地域社会にいかなる繋がりや隔たりを生み出しているかを、人びとの海利用の歴史とジュゴンとの関係、および保護活動家の営みとの関連で理解し、新たな理論モデルを提示した。具体的には、まず沖縄の海利用の変遷と基地計画の歴史を明らかにした。次にジュゴン保護と基地反対運動の展開について現地調査を実施した。さらに事例研究の成果をふまえ、人と動物の関係論や環境・社会運動論に関する理論研究を行なった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、動物を介した環境保護と基地反対運動の接続、ジュゴン保護をめぐる沖縄地域社会内部での分断や、外部社会との繋がりを、歴史分析とフィールドワークの双方から捉えるものである。その点で、本研究は人と動物の関係論と、人類学の環境・社会運動論を接合し、新たな領野を切り拓くものであり、その点で学術的な意義をもつといえる。

また本研究では、名護市辺野古で、基地移設計画を機に生じたジュゴン保護をめぐる住民間の対立や分裂の経緯を明らかにすることで、ジュゴン保護活動家と地域住民との相互理解の道を探り、地域社会の平和と野生動物との共生を模索する。その意味で、環境倫理学に対しても学術的、社会的に貢献しうる。

研究成果の概要（英文）：This study investigates how the dugong protection linked to the anti-base movement in Henoko, Nago City of Okinawa was generated and how they create connections and gaps in local communities from a perspective of the history of sea use and the relationship with dugongs in relation to the conservation activities. Specifically, I first clarified the history of sea use in Okinawa and the history of base planning. Next, a field survey was conducted on the protection of dugong and the development of anti-base movement. Furthermore, based on the results of case studies, we conducted theoretical research on the theory of human-animal relations and the theory of environmental and social movements.

研究分野：文化人類学

キーワード：基地反対運動 環境問題 エコロジー ジュゴン 沖縄

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

申請者の調査地である沖縄では、「自然の権利」訴訟の流れをくむ「沖縄ジュゴンの権利」訴訟や保護活動が、辺野古の海の埋め立て反対という、軍事化に抗する運動と結びつき、多様な社会的・文化的バックグラウンドをもつ人びとや集団を結びつけ、種の壁をも越えうる繋がりを生み出してきた。しかし、その裏側では、ジュゴン保護をめぐる活動家、地元漁師、地域住民、さらには普天間地域の住民とのあいだで対立が起きている。まさに現代沖縄では、ジュゴンの海という自然環境をめぐる、基地反対という平和への希求のただ中で、人と人のあいだに乗り越えがたい分断が生じているのである。

申請者は、博士論文とその後の研究において、沖縄本島の養豚場・屠殺場・市場での長期フィールドワークと、歴史文書の分析から、養豚場の悪臭問題と排斥運動、伝統文化復興運動と観光化の文脈における在来豚アグーの復活、養豚の現場でみられる人とブタの両義的な関係の生成を分析し、従来の沖縄研究において看過されてきた養豚をめぐる排除の構造（沖縄の支配的な文化がもつ抑圧的側面）を明らかにし、産業社会の人間と家畜を取り巻く複雑な関係を解明してきた。

平成26年以降は、養豚と結びついた環境問題が沖縄系移民社会においても見られることを知ったことから、申請者はこれまで取り組んできた養豚場の悪臭問題と、ブタを介した人と人の関係の変化を他地域にも援用して理解する必要性を感じ、沖縄系移民社会との比較研究を行ってきた。さらに平成27年度から、研究拠点を、普天間基地を眼前にひかえる沖縄国際大学に移したことで、反軍事・反基地への胎動を強く感じる研究環境におかれ、環境問題と基地問題が重なり合う、軍事環境問題に関心をもつようになった。

辺野古の海に生息する絶滅危惧種ジュゴンと、その餌場を守る活動は、狭い意味での「環境・野生動物」保護を越えて、反軍事・反基地への運動と明確に接続する形で、環境破壊に抗議する環境NGOのみならず、市民や運動家、学生団体といった多様な人間・集団を繋ぎ合わせてきた。こうした繋がりの一方で、地域社会内部では、ジュゴンや海の意味づけをめぐる相違、普天間基地の危険性や撤去、辺野古への移設に対する意見の相違、米軍全般と海兵隊に対する位置づけの相違など、複雑な対立や分断もみられる。

本研究では、これまでの研究で得た知見を活かしながらこの問題に取り組み、沖縄社会の内外において環境破壊への抗議・ジュゴン保護と一体となった反軍事運動がもつ繋がりと分断の論理を明らかにし、より広い視野からこの現象を理解する。

ジュゴン保護は沖縄の人と動物の関係や、軍事環境問題を理解するうえで、無視することのできない重要な研究テーマである。しかし、沖縄の基地に起因する環境破壊に関しては、自然科学の研究 [e.g. 山内他 2012] が進んでいるだけで、それらを総合的に扱った人文・社会科学の研究は極めて少ない。

また人類学の軍事・基地研究は、最近になって軍隊・軍人研究 [田中編 2015] や、米軍統治下の沖縄のアイデンティティ論 [Inoue 2007] が登場したが、環境保護と結びついた基地反対運動を扱ったものはほとんどない。ジュゴン保護に関しては、法学（自然の法的権利・原告適格 [関根 2007]）の論考があるだけで、包括的な研究がみられないのが現状である。

本研究では、名護市辺野古において、ジュゴン保護と基地反対の運動が連動して成立する歴史的経緯に着目し、環境保護と基地反対運動の研究を接続させることで、動物、環境・基地問題、社会運動という3つの問題系にまたがる事象を総合的に捉える理論的枠組みを構築することを目指す。

引用文献

- ・ Inoue Masamichi 2007 *Okinawa and the U.S. Military*. Columbia University Press.
- ・ 田中雅一(編) 2015 『軍隊の文化人類学』風響社。
- ・ 山内繁雄他 2012 「軍事活動による環境問題」『琉球列島の環境問題』桜井高俊他編、高文研。
- ・ 関根孝道 2007 『南の島の自然破壊と現代環境訴訟』関西学院大学出版会。

2. 研究の目的

本研究の目的は、これまで申請者が沖縄本島を中心に研究してきた養豚と環境問題という枠組みを、軍事環境問題へと展開することで、辺野古の基地反対と結びついたジュゴンの保護活動がどのように生じ、地域社会にいかなる繋がりと分断を生み出しているかを、人びとの海利用の歴史とジュゴンとの関係、および保護活動家の営みとの関連で理解し、新たな理論モデルを提示することにある。この目的を達成するために、まず沖縄の海利用の変遷と基地計画の歴史を明らかにする。次にジュゴン保護と基地反対運動の展開について現地調査を実施する。さらに人と動物の関係論や環境・社会運動論に関する理論研究を行なう。

3. 研究の方法

上記の研究目的を達成するために、沖縄県名護市辺野古およびその周辺地域と那覇市で資料収集と現地調査を行なった。具体的にはまず、沖縄県公文書館、沖縄県環境部自然保護課や辺野古新基地建設問題対策課、沖縄県立図書館等の環境・基地関連資料を収集した。次に、名護市辺野古および辺野古以北の地域にて、約3ヶ月の現地調査を行なった。主に、ジュゴン保護に関わる環境NPOや活動家、市民団体を対象に、インタビュー調査および参与観察を実施した。

さらに、研究目的に即し、動物論、人類学の環境・社会運動論などの文献を批判的に検討し、動物・環境保護と結びついた基地反対運動に関する理論研究を行なった。以上の研究成果として、研究発表および論文執筆、ならびに地域の一般市民を対象とした住民討論会と講演を2回、主催した。

4. 研究成果

(1) 辺野古への基地建設計画と環境対策

まず、沖縄における基地と環境を取り巻く状況について文献調査を実施した。次に、沖縄の基地問題と環境問題の位置づけを明らかにするために、基地にかかわる環境問題の統計資料や関連政策を調べた。さらに、辺野古への基地移設にともなう埋め立て区域や滑走路建設区域の変遷、および環境対策の動向を把握した。

(2) 辺野古の人びとの海利用とジュゴンとの関わりの変遷

辺野古の人びとの海利用の歴史を、漁業などの生業や、海への信仰と意味づけ、海洋生物との関わりとの関連で明らかにした。とくにジュゴンと人びとの関係（ジュゴン食、歯の装飾品の儀礼的利用）とその変遷について、名護市誌（民俗編）や辺野古字誌、その他聞き書集をもとに把握した。くわえて、沖縄県公文書館や沖縄県行政資料センターのデータベースにアクセスし、海洋生物の保護事業や、海岸整備やビーチ造成などの環境開発にかかわる資料のうち、名護市への言及箇所を集中的に収集し、データを補完した。

(3) 沖縄のジュゴン保護活動の現在

近年、沖縄におけるジュゴンの生息頭数は、非常に減っており、2頭ほどだとされる。こうした状況は、辺野古への基地建設・海の埋め立てにより、拍車がかかると危惧されている。申請者は、名護市辺野古で活動続けるジュゴン保護団体および環境NPOで実地調査を行なった。ジュゴン保護にかかわるメンバーに対して、ジュゴン調査の経験と保護活動の展開についての語りを収集するとともに、基地建設予定地の現場で、ジュゴンの生息状況、生息場所と餌場、および具体的な保護対策について聞き取り調査と参与観察を行なった。

また、基地建設の動向および進捗状況をめぐる変化が、現在、辺野古で活動続ける人びとの経験にいかん影響を及ぼしているかを、とくに地域住民との関係から明らかにした。NPOのメンバーと住民の日常的な交流や交友関係について聞き取り調査と参与観察を行なうことで、ジュゴン保護活動家と地域住民との繋がりと隔たりについて、主観的な経験に即して理解を目指した。

(4) 「沖縄ジュゴンの権利」訴訟の位置づけ

日本の法・裁判制度では基本的に、生きている人間だけ（法人を除く）が権利主体として訴訟を起こすことができるのに対して、アメリカでは自然の法的権利が認められ、人間以外の生物も裁判にたてるようになった（自然の権利訴訟）。本研究では、辺野古の海に生息するジュゴンがいかなる経緯で原告の一員となり、アメリカの国防長官を訴える「沖縄ジュゴンの権利」訴訟を起こすに至ったかを、原告団のメンバーへのインタビュー調査から明らかにした。そこから、ジュゴンや海をはじめとする自然観や環境意識、基地・軍事問題に関する認識の傾向性と特徴を分析した。

「沖縄ジュゴンの権利」訴訟は、普天間基地の移設にともなう辺野古の海の埋め立てが、「沖縄の基地問題」という枠を越えて、広く環境破壊への反対運動であるということを知り、沖縄の外との繋がりをもちた。しかし他方で、地域社会内部では、この訴訟により強固な繋がりをもちたとは言い難い状況もある。本研究では、ジュゴンという動物と地域の人びとの関わり、および文化的な意味づけや価値観等を調査することで、ジュゴン訴訟がもちうる社会的・文化的なインパクトを分析するとともに、社会問題・環境破壊への異議申し立ての試みがより大きな運動となるためにはいかなる導引が必要であるかについて、分析を行なった。それによって、ジュゴンの保護活動や訴訟が、地域社会の問題を越えて、広く環境運動のなかに位置づけられ、沖縄と国際社会を結びつけていく枠組みを考察した。

(5) 軍事－動物論と環境・社会運動論の理論研究

以上の調査研究を踏まえ、本研究では、人類学における人間と動物の関係を扱う研究、環境問題研究、社会運動論を批判的に検討した。人類学における人と動物の関係論では、各地域の狩猟や家畜飼育の民族誌的事例から、自然と社会の二分法、そこでの人間中心主義的な序列化を批判し、動物の主体性や人格を認めるかたちで一大潮流を築いてきた [奥野他編 2012]。しかし、人間中心主義批判の議論において、基地建設や戦争といった軍事行動にともなう動物の犠牲や人格が取り上げられることは稀であった。逆に、反基地・反軍事論においても、動物の問題が正面から論じられることは極めて少なかった。最近になってようやく、戦争や軍事産業における動物の犠牲を扱った歴史学の研究 [Nibert 2013; Nocella, Salter, and Bentley (eds.) 2014] が現われたが、反基地・反軍事の運動と一体となった野生動物保護の現代的展開を捉えた研究は未だない。本研究では、事例研究を積み重ね、人と動物の関係論と軍事環境問題・社会運動論を接合することにより、動物、環境・基地問題、社会運動という3つの問題系を総合的に捉える理論的枠組みを構築した。

引用文献

- ・奥野克己、近藤祉秋、山口未花子編 2012 『人と動物の人類学』春風社。
- ・Nibert, David A. 2013 *Animal Oppression and Human Violence*. Columbia University Press.
- ・Nocella, Salter, and Bentley (eds.) 2014 *Animals and War*. Lexington Books.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 比嘉理麻	4. 巻 84(6)
2. 論文標題 野生獣肉の大量生産・消費は可能か - 沖縄における豚肉の大量消費から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 農業と経済	6. 最初と最後の頁 32-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 比嘉理麻	4. 巻 108
2. 論文標題 ジュゴンからブタへ - 沖縄の肉食文化と供犠	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 VESTA	6. 最初と最後の頁 31-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 比嘉理麻	4. 巻 -
2. 論文標題 食の流通と消費	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代食文化論-文化人類学の視点から	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 比嘉理麻	4. 巻 85(1)
2. 論文標題 書評「シンジルト・奥野克己編 『動物殺しの民族誌』」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 文化人類学	6. 最初と最後の頁 557-560
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 比嘉理麻
2. 発表標題 野生獣肉の大量生産・消費は可能か 沖縄における豚肉の大量消費から
3. 学会等名 国立民族学博物館・共同研究会「消費からみた狩猟研究の新展開 野生獣肉の流通と食文化をめぐる応用人類学的研究」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 比嘉理麻
2. 発表標題 ブタと生きる - いのちをもらって食べるということ
3. 学会等名 からだのシューレ（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 比嘉理麻（赤江雄一編、島村菜津、山下範久、勝川俊雄、生源寺眞一、池上俊一、山本道子、大道寺慶子、勝川史憲、野口和行、小泉武夫）	4. 発行年 2017年
2. 出版社 慶應義塾大学出版会	5. 総ページ数 312（145-163）
3. 書名 食べる - 生命の教養学12	

1. 著者名 比嘉理麻（国立民族学博物館編）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 -
3. 書名 世界の食文化百科事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

リサーチマップ

<https://researchmap.jp/higarima/>

沖縄国際大学総合文化学部教員一覧

<https://www.okiu.ac.jp/gakubu/sogobunka/teacher/rima>

からだのシュレ vol.12 「ブタと生きる：いのちをもらって食べるということ」

https://note.mu/karada_schule/n/nc71585366925

リサーチマップ

<https://researchmap.jp/higarima/>

沖縄国際大学専任教員一覧

http://www.okiu.ac.jp/academic/teacher/pdf/sougou_bunka/ac-higarima20170401.pdf

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----